

ニンニクの品種の特性と分類

石橋祐二・小川 勉・*松原德行(長崎県総合農林試験場・*長崎県農業経営大学校)

Yuji ISHIBASHI, Tutomu OGAWA and Noriyuki MATUBARA : Ecological and Morphological Classification of Garlic Cultivars

筆者らは、これまで東アジアを中心に、熱帯から北緯44°一带に分布する生態的、形態的特性を異にする多数の品種について、その特性を調査してきた。その結果、諸特性のうち冬期の生態的特性は、収集先の緯度とかなり明瞭な関係があり、分類の指標として利用できると考えられたので、概要を報告する。

1. 材料及び方法

調査には国外31, 国内30の計61品種を用いた。栽培は北緯33°にある長崎県諫早市の農試圃場で1983~1985に行った。植付けは1983年が10月4日, '84年が10月5日, '85年が10月14日で、黒マルチ栽培とした。植付密度は畦幅1.4m, 4条植え, 株間10cmとした。

諸特性の調査は、調査基準に従って行ったが、越冬時の草型については3カ年とも1月下旬~2月上旬における葉のわい化の程度を観察した。冬期の生長性については、1984年の1月6日~2月6日までの1カ月間の新葉(抽出始めの葉)の伸長量を調査した。

2. 結果及び考察

品種によって越冬時の草型が異なり、葉が甚だしくわい化し、冬期に生長を停止する品種、逆にほとんどわい化がみられず、生長を継続する品種及びその中間の品種に分けられた。また、この特性は品種の収集先の緯度と関連があり、北緯30°以南の品種は冬期に葉のわい化がみられず、生長を継続し、36°以北の高緯度産の品種は葉のわい化が著しく冬期生長を停止する品種が多かった。また、31~35°の品種は全般に両者の中間を示すものが多かった(第1図)。

以上のような特性に基づいて、品種を低緯度型、中緯度型、高緯度型の3型に大別し、さらに各型における諸特性によって、第1表のように品種を区分した。

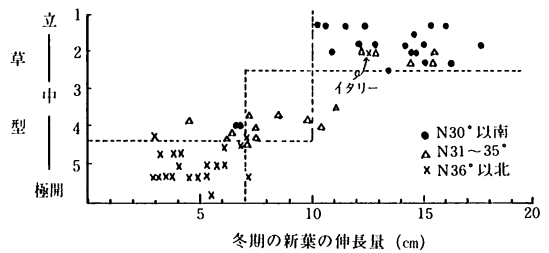
低緯度型は、冬期の生態的特性からみて、本来冬期温暖な地域に適応して生育していると考えられる品種であり、この型に区分した品種は、結球が早く、極早生~早生であり、抽だいは不完全でリン片が3層以上に着生する品種が多い。日本の大島以南の品種はすべてこの低緯度型に属していた。

中緯度型の品種は、低緯度型と高緯度型の中間の特性を示し、早中生~中晩生で、すべての品種が完全抽だりする。リン片は2層に着生し、リン片数は中位である。

日本の暖地在来種の多くはこの型に属する。

高緯度型は、冬期には生育が停滞するが、3月以降の気温の上昇と共に急速に生長する品種であり、寒地に適応している品種と考えられる。結球は遅く、中晩生~極

晩生で、完全に抽だりする品種からまったく抽だいがみられない品種まである。日本の寒地産の品種はすべてこの型に属していた。



第1図 越冬期の草型と冬期の生長度

第1表 品種の分類

| 区分 | 結球 早晩性 | 抽だ い性 | リン 片数 | 品 種 名 |
|------|-----------------|----------|----------|--|
| 低緯度型 | 極早生 | 不完全 | 多中 | タイ国, 中国貴州(B), 長沙, 成都 沖繩早生, 瀬戸内 南京 |
| | | 完全~不完全 | や多 | 台中軟骨, 台湾軟骨, 学甲 イタリー, 遼州極早生, 浜松産 |
| | 早生 | 不完全 | 極多 中少 | エジプト 延平, 台湾在来 海南島, 沖繩(1), (2), 与論島 エラブ小球, 大島(2), (3) |
| 中緯度型 | 早中生 ↓ 中晩生 | 完全 | 中 | 上海系, 嘉定, 河南 鹿児島在来, 天草在来, 佐賀在来 高知在来, 韓国暖地(B), 韓国寒地 昆明, 江蘇, 亳州早生, 千葉(B) |
| | | 完全~不完全 | 中 や多 | 中国貴州(A), 山東 チリー, カリフォルニア |
| 高緯度型 | 中晩生 | 不 | 極多 | 加州早生, 加州晩生 |
| | | 完全 | 中 | 七里營, 中国ウルムチ, 八幡平 福島在来, 七ヶ浜在来, 岩手桃色 |
| | 晩生 ↓ 極晩生 | 不完~不 | 少 | 石川六片, 福地系, 富良野 |
| | | 不 | 少 | ニューホワイト |